

## 保育の現場から

# 実りを味わう

上坂元絵里

晩秋を迎え、一年前の今ごろ、園庭の田んぼで稲穂が日増しに頭を垂れ、心躍らせながら稲刈りをしたことが思い出されます。

人事交流により、東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎で子どもたちと生活する機会に恵まれ、そこで五歳児の子どもたちと共に、お米を育てる初めての経験の中で感じたことを中心に、実りの味

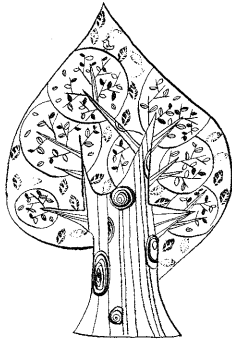
わいを振り返ってみたいと思います。

武蔵野の豊かな自然を残すキャンパス、大学の門をくぐるとケヤキの並木が春は新緑、夏は濃緑、秋は紅葉と衣替えして迎えてくれます。幼稚園の庭にも大きなケヤキがそびえ、子どもたちの遊ぶ姿を見守っています。四歳児との生活を始めて間もないころ、このケヤキの庭でD君が二度も

カブトムシを見つけてきて、「東京でこんな生活が送れるなんて」とびっくりさせられました。

### 春、「ノビル見つけた」

さて、その子どもたちと迎えた二度目の春は、ノビル見つけで始まりました。春休みのある日、日夫が家族と一緒にノビルを採りに来ていました。私はノビルの名前は知っていたものの、採った経験はなく、日夫の母親に採り方を教えてもらいました。「土が軟らかそうなところに割りばしをさして、葉っぱが切れないように抜くんです」



と。しかし、なかなかうまく抜けませんでした。

一学期がスタート。ケヤキの庭で遊んでいると、かの日夫が「ノビルが採れた」と見せにきました。なるほど鉄棒の奥辺り、そこここにちらほらノビルが生えています。『割りばしもないのに、よく抜けたものだ』と感心しつつ、「お友達にも教えてあげて」と声をかけました。日夫が「お味噌汁にして食べられるよ」と言うので、それを聞いたほかの子どもたちは、大事そうにビニール袋に入れて持ち帰りました。ノビル摘みが子どもたちの中に浸透すると並行して、私たちも『あら、ここにも結構生えてる。ここは抜きやすそう』とノビルの園内及び学内分布がだんだんわかってきました。

ちょうど、五歳児は毎月の誕生会に自然の実りを生かしたものをおやつとして食べようと計画し

ていたので、四月はノビルの味噌汁を作ることにしました。一度に十分な量のノビルを収穫するには、園内だけでは少し足りず、学内散歩に出かけ収集してくることに。そこでもH夫が大活躍。

「農場に行く途中の○○にいっぱいあるよ」という情報を頼りに出かけました。前日に雨が降り、土が水を含んでいたことも幸いし、大豊作。おもしろいように抜けて、採りすぎたかしらと思うくらい園に持ち帰りました。

下ごしらえもなかなか大変でした。水で洗いきれいにし、薄皮をむきます。数人でたらいを囲み、おしゃべりしつつも真剣に手先を動かす姿はとてもほほ笑ましく、幼稚園の一角が農協に変身したようでした。

その後も「ノビルがとれたよ」とうれしそうに家を持ち帰り、「お母さんが味噌汁にしてください」という報告が届きました。秋にも「ノビルが

あつたよ」の声、年に二回採れるというのも新たな発見でした。『身近な自然に目を向ける』という表現は頻繁に使いますが、実際、目を向けるとこんなに発見やおもしろさを味わえるものかと実感させられました。

## 田んぼの一年

五月に入ると、子どもたちと一緒に田んぼの準備が始まります。田んぼに新しい土を加えるために、園舎の隣の広場から土を運びます。小さなバケツではなく大きめのたらいやバケツを用意すると、数人が一緒に力を合わせて運ぶことが必要になります。二人で仲良く運んでいたA夫とC子、これがきっかけで翌日も何だか楽しそうに一緒に遊んでいました。田んぼ側で受け取っていると、「ああ、重かった。まだ運ぶの？」と渋々な子、「よし、もう一回」と走りだす子、いずれにして

もかなりハードな労働の担い手です。

次に、保護者に代掻きをする予告をし、汚れても構わない準備を協力してもらい、泥遊びをします。大人が圧倒されるほど思う存分楽しめる子、泥遊びをするという話を聞いただけでその日は登園の足が重くなる子、最初はちょっとためらいつつ結局は最後までいる子、楽しみ方はさまざまですが、とにかく遊んだことが立派に代掻きという仕事として役立ちます。

苗は、元保護者の実家から、好意で譲り受けました。折々にメールで相談をし、アドバイスもしてもらいました。また、数年前から地域の専門的な知識を持っている方が協力してくださる連携が始まり、年々充実してきています。そんな人的ネットワークづくりが進んでいることを、とても素敵だと感じました。

土の準備、田植え…と、こうした専門家の協力

なくしてお米を育てる取り組みは進められませんが、特にそれを痛感したのが、害虫発生のおかげで。カラスやスズメ対策で、田んぼには防鳥ネットを張って覆っておきました。ところが、夏になると、シジミチョウのような小さな虫がバタバタとネットの目をくぐって稲に止まっています。地域の I 先生は元小学校の理科の先生、「ウシカだな」と対策をアドバイスされました。『ウシカ?』聞いたこともない響き、ネットで検索してみると、「かつての大飢饉の原因がこのウシカ(雲霞)という虫だった」、「大群をなして飛翔する姿から、雲霞のごとく」という慣用語が出てきた」、そして、このウシカの対策は相当大変なものらしいとわかってきました。

さらに、かじられたような跡やクルッと丸まっている葉を発見しました。イネネットムシ(稲苞虫<sup>いねぼうむし</sup>)との出会いでした。正式にはイチモンジセセ

リ、<sup>いねこむし</sup>「稲苞虫」は、幼虫が稲の葉を包んで隠れる様子からついた通称だそうです。クモの糸のようなもので葉っぱを縫い合わせた所を開くと中に幼虫が潜んでいます。葉っぱを借りて安全な住処をつくる技には逆に感動すら覚えるほどでした。

子どもたちは、イネツトムシという名前を覚え、毎日登園するとすぐに「イネツトムシいないか見てくる」と、田んぼに向かうことを根気よく続けました。田んぼをじっと見ていると、クルつと丸まったイネツトムシの潜む葉が目飛び込んできます。「あつた」「こつちも」という子どもたちの目は、立派なハンターの眼差しでした。毎日、害虫駆除を続けていると、少しずつですが丸まった葉が少なくなってきました。農葉を使わずに稲作をする大変さがほんの少しですが実感されました。

稲が随分と背丈を伸ばすのを見守りながら、秋

の運動会には『獅子の舞』を踊り、五穀豊穣を願いました。収穫が終わった後は、はぜ木に稲を干した田んぼの周りで踊りながら「ありがとう祭り」をしました。日本の暮らしや伝統行事は、お米作りと密接につながっていることを、ここでも再認識しました。

一月は収穫したもち米（コガネモチ）でおもちつき。自分たちが育てたお米でついたおもちの味は、本当に格別でした。

### 生活を振り返る

三学期、お米を育てる体験を振り返って、一番覚えていることを絵に描いてみました。田んぼをめぐる情景は、大人だったらとても描きにくいと思う場面が多いのですが、二クラス七十人の子どもたちは、実にさまざまな瞬間を描きました。つき組に絵を見に来たA先生が、「順番に並べてみ

たら？」とN子たちに投げかけてくれました。N子たちは「これが先」とときばきと並べ変え、季節を追った田んぼ絵巻を完成させました。

五月の土づくりから一月のおもちつきまで、長期間にわたる田んぼの取り組みを通して、子どもたちが一つひとつの過程を心に刻んだことを読み取ることができました。おもちつきでついたおもちは、分けて冷凍保存しておき、二月の誕生会にはお汁粉、三月にもスペシャルおもちとして再び味わいました。子どもたちは、毎月の誕生会のおやつを四月から並べて「おやつマーチ」をつくり、繰り返し歌いました。

五歳児になると、子ども自身が自分たちの生活を見通し、自分たちで生活を進めていけるようになるとより強く願います。これから先の生活がわかることと同様、これまでの生活を振り返ってわかることも、見通しをもって生活することにつながる

と、感じました。また田んぼの取り組みのいろいろな場面で、働き手としての役割を担う子どもたち、そこで生き生きと力を発揮する子どもたちを目の当たりにすることができました。

自然とかかわる子どもたち、それぞれの場面で出会った真剣なまなざし、指先に神経を集中した動きが、私の心に刻まれています。そして子どもと一緒に、体を通して変化や成長を感じ、体験を通して知識を得る楽しさを私も味わうことができました。小さな頼りない苗をそつとつかんだ感触、稲刈りの時の太くがっちりと言った手応え、籾殻むきをしながら嗅いだお米の香り…。

お弁当の時、「お米は農家の人が一生懸命作ってくれたものだから、一粒残さずきれいに食べましょうね」という子どもたちへの言葉にも、以前より思いがこもっているに違いありません。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)